奄美大島における観光イメージおよび観光活動の変遷と宿泊施設の関係
THE RELATIONSHIP BETWEEN THE TRANSITION OF TOURISM IMAGE AND ACTIVITY,
AND ACCOMMODATIONS IN AMAMI OSHIMA清瀬 正太郎^{*1}, 十代田 朗^{*2}, 津々見 崇^{*3}

Shotaro KIYOSE, Akira SOSHIRODA and Takashi TSUTSUMI

This research concerns the multilayered images and activities of tourism, such as nature experiences and cultural experiences, found on Amami Oshima Island, Kagoshima Prefecture. The expansion of its areas where the accommodations located was noted by observing the relationship between Amami's tourism image and activities and its accommodations from 1978 to 2018—a timeframe that we divided into four periods. Among the recent accommodations, the small-sized ones account for about 80% of the total. Furthermore, it is possible that small-scale accommodations that are easily adaptable to tourism shifts can provide a “place” that sustains the local culture and tourism.

Keywords: Tourism Image, Tourism Activity, Accommodation, Community's Culture Experience, Sustainable Tourism, Amami-Oshima

観光イメージ, 観光活動, 宿泊施設, 集落文化の体験, 持続可能な観光, 奄美大島

1. はじめに

1-1 研究の背景と目的

「個人の趣味嗜好が強く反映する新しい観光スタイル」の本格化が指摘¹⁾されて久しいが、観光と密接な関係にある宿泊業にも変化がみられる²⁾。宿泊施設は単に観光の拠点になるだけではなく、宿泊すること自体が観光体験に大きな影響を与えると考えられるため、宿泊場所としてだけではなく、その地域の観光イメージ³⁾や観光活動⁴⁾と結びついた、持続可能なものとして計画されるべきである。したがって、観光イメージや観光活動の変遷と宿泊施設の関係を考えることは、今後の持続可能な観光における宿泊施設のあり方に対する知見を与えるものと考えられる。

離島は地理的特性により宿泊を伴う滞在型の観光活動を取ることが特徴で、宿泊施設の存在は重要である。過去には「離島ブーム」が起こるなど、注目度や目的地としてのイメージの大きな変化を経験してきた。こうした特徴に加え、本研究で対象とする鹿児島県奄美大島では、近年の LCC (格安航空会社) の就航や世界自然遺産登録の機運⁵⁾の高まりも相まって、今後新たな観光イメージや観光活動の登場と、さらなる観光客の増加および客層の拡大が予想される。

以上より、本研究では離島観光地の一つである奄美大島⁶⁾について、1970 年から 2018 年を対象に、観光イメージと観光活動の変遷 (3 章) と宿泊施設の変遷 (4 章) を明らかにし、それらの関係を考察する (5 章) ことで観光における宿泊施設のあり方への知見を得ることを目的とする。

1-2 本研究の位置づけ

奄美大島の観光について既往研究・調査では、世界自然遺産登録へ向けた動きのなかでエコツーリズムの推進があったこと⁷⁾、「見る」観光から「体験する」観光への移行があったこと⁸⁾などが指摘されている。また、観光地の経年的な変化に注目した研究としては、複数の観光地について観光客数の変化から時代区分を行い、その背景となった出来事を照らし合わせることで、観光地のブランドを動かす要因を明らかにし、資源保全プロセスと関連させ一般化したモデルで提示したもの⁹⁾などがみられる。さらに観光地と宿泊施設に関連した研究としては旅館街の立地傾向と温泉町の成立過程を扱ったもの¹⁰⁾などがみられるほか、宿泊施設一般については、ゲストハウスの増加の背景として日本の宿泊施設形態の選択肢の少なさが関係している可能性があること¹¹⁾、持続可能な観光まちづくりや地域価値向上に繋がる宿泊施設のあり方として地域一体となったものが登場していることなど¹²⁾が指摘されている。上記の既往研究と同様に本研究においても入込客数変化による時代区分を基盤に分析を行うが、宿泊施設の変遷について観光イメージや観光活動と照らし合わせることで関係を考察する点に独自性があると考えられる。

1-3 研究の資料

まず、2 章では 3 章以降の分析の準備として、奄美群島の各種統計資料等を集録した「奄美群島の概況¹³⁾」を用いて時代区分を行った。3 章では、各期について奄美大島の観光イメージ及び観光活動の特徴をとらえるため、その時代に継続的に発行されていた旅行・観光雑

¹⁾ 森トラスト(株) 修士 (工学)

²⁾ 東京工業大学環境・社会理工学院建築学系 准教授・博士 (工学)

³⁾ 東京工業大学環境・社会理工学院建築学系 助教・修士 (工学)

MORI TRUST Co., Ltd., M.Eng.

Assoc. Prof., Dept. of Architecture and Building Engineering, School of Environment and Society, Tokyo Institute of Technology, Dr.Eng.

Assist. Prof., Dept. of Architecture and Building Engineering, School of Environment and Society, Tokyo Institute of Technology, M.Eng.

誌として「旅¹⁰⁾」と「るるぶ情報版 屋久島奄美種子島¹¹⁾」を分析に用いた。4章では、各期の宿泊施設の特徴をとらえるため「奄美群島の概況」の統計資料のほか、主に電話帳¹²⁾を用いて分析を行った。5章では3章と4章の結果をもとに奄美大島の観光イメージ及び観光活動の変遷と、宿泊施設の関係を考察した。

2. 入込客数による時代区分と観光活動の実態及び施策の方針

はじめに、経年的な分析を行うにあたり時代区分を行う。離島における入込客数の変化は、観光を取り巻く状況の変化と関連があると予想できるため、1970年から2018年の奄美大島における入込客数の変化より、減少傾向から増加傾向に転じる直前である1984年、2010年の2カ所で区分し、さらにその間1985年から2010年を期中最大入り込み客数となる1994年で2つに区分することで時代を4つに区分した(Fig. 1)。続いて、観光という観点から各期の特徴を把握するため、観光活動の実態と施策の方針について記述された「奄美群島の概況」における「観光の概況」を経年的に確認し、その文章について前年度から変化がみられた年度の該当箇所について抜き出して年表を作成した(Table 1)。入込客数による時代区分と観光の概況による年表を比較すると、入込客数による時代区分の境界が観光の概況に記述変化がみられない時期に一致することがわかる。したがって、入込客数による時代区分における各期の特徴は観光の概況にみられた観光活動の実態及び施策の方針より次のように説明できる。

1期(1970-1984)：天然の海水浴場が多く、海洋性レクリエーション基地として期待されていた。オイルショック以降の景気の低迷や国民の観光需要の変化、海外旅行ブームや沖縄観光の急進などを原因に1981年以降、奄美群島への入込観光客数が減少傾向になる。

2期(1985-1994)：沖縄の大型リゾート開発を意識した時期であり、ゴルフ場やリゾートホテル等の観光開発が注目された。奄美空港ジェット化などにより本土からのツアー客、ゴルフ客が増加し、奄美群島への入込客数は増加に転じた。

3期(1995-2010)：消費者ニーズが多様化し、大きな観光施設として「マングローブパーク」や「奄美パーク」など観光施設の充実がはかられた。さらに、自然や固有の文化などの資源を生かした体験滞在型観光推進の必要性が指摘され始めた。

4期(2011-2018)：「奄美・琉球」が世界自然遺産登録候補地として暫定リスト記載が決定し、登録に向けた地元住民や関係機関・団体の取組が期待された。地域ならではの体験・滞在型観光の促進も引き続き目指され、LCC就航や奄美群島振興交付金を活用した航空航路運賃の軽減により入込客は増加傾向に転じている。

以降の章では、この4つの時代区分を基に分析を行う。

3. 雑誌が提示する奄美大島の観光イメージと観光活動の特徴

本章では旅行・観光雑誌を用いて、2章における各期についてマーケット・トレンドの視点から、提示された奄美大島における観光イメージ及び観光活動の特徴を明らかにする^{注6)}。

3-1 雑誌「旅」にみる奄美大島の観光イメージと観光活動

ここではまず、当時継続的に発行されていた資料として1924年から2004年まで発行されていた月刊誌「旅」を用いた分析を行う^{注7)}。

記事のタイトルに「奄美」を含むものは36記事確認できた^{注8)}。そのうち研究対象とする年代である1970年以降の19記事に注目し、

Fig. 1 Change in Number of Tourist and Periodization (prepared using “Fact Sheet of Amami Island Group”)

Table 1 Chronology of the Summary of Tourism and Periodization (prepared using the “Fact Sheet of Amami Island Group”)

Year	Variation in Description and Keywords (prepared using “Fact Sheet of Amami Island Group”)
1970	Many Natural Bathing Beaches Landscape of the Coral Community at the Sea Bottom, Glass-Bottom Boat Kimono of Oshima-Tsumugi with Extensive Tradition
1971	
1972	Setting of “Amami Ten Views”
1973	Oil Shock Marine Recreation Base
1974	Designation of Amami Gunto National Park
1975-1986	
1987	Overseas Travel Boom Caused by a Stronger Yen Exponential Growth in Okinawa Tourism
1988	New Amami Airport’s Improvement for Jet Airplanes Continuing Mega Marine Resort Development in Neighboring Okinawa Prefecture Tourism in Amami Islands Faces a Major Turning Point Increase of Tourists on Tours and Golfers from the Mainland Establishment of a (Small) New Resort Hotel in Amami Rush of Extension or Reconstruction of Existing Hotels and Guesthouses (future) Development of Tourist Facilities (future) Promotion of Development of Tourism Strongholds like Golf Courses or Resort Hotels
1989	Japan’s First Underwater Observation Submarine and Semi-submersible Boat
1990	
1991	A Spate of Typhoon Attacks in the Summer Tourist Season
1992	Introduction of Direct Flights between Amami and Tokyo
1993-1997	
1998	Attracting Sports Camps in Winter Further Diversification in Customer Preferences such as an Eco-Tour Promotion of Experience-based Tourism by Utilizing Natural and Cultural Resources
1999,2000	
2001	Opening of Sumiyo Kuroshio-no-mori Mangrove Park
2002	Opening of Amami Park
2003	(future) Public Relations Activity as an Island of Healing and Long Life Promotion of the Experience and Long-Stay Tourism such as Eco-Tourism
2004	(future) Public Relations Activity as an Island of Healing, Long Life, and Plenty of Children
2005	
2006	Opening of Thalasso Amami-no-ryugu
2007	Opening of the Prefecture’s First Sea Station: Setouchi Umi-no-eki
2008-2012	
2013	The Decision by the Government to Inscribe “Amami and Ryukyu” on the Tentative List as a Precondition for Nomination for the World Heritage Site List of UNESCO
2014	Introduction of Low-Cost Carrier (LCC) Flights Reduction of Air and Marine Fares through Subsidies to Promote the Amami Island Group
2015	(future) Creating Tourist Routes in a Large Area such as Circular-Type Tourism Connecting the Inside and Outside of the Amami Islands (future) Appealing the Attraction of Resources for Health, Long Life, and Healing and Attracting Sports Camps
2016	Reduction of Air and Marine Fares through a Project for Promotion of Co-operation and Interchange between Amami and Okinawa
2017	Designation of Amami Gunto National Park
2018	(future) Effective Utilization of Rich Local Resources (future) Promotion of Creating Unique Experiences and Long-Stay Tourism Programs of the Region (future) Development of an Attractive and Unique Tourist Destination

* (future) means mentioned as a policy in the future. A diagonal stroke indicates the period with no change in description.

各期について観光における特徴を読み取る (Table 2)。

1期(1970-1984)：記事数は9、ページ数は合計40ページ確認できた。1年あたりの記事数は0.6記事、ページ数は2.7頁となる。

記事のタイトルをみると、南島としての特集が多くみられ、沖縄と共に特集されることもあり、1972年の沖縄本土復帰の影響を大き

く受けた離島ブームの様子がうかがえる。

例えば、1972 年 6 月の記事を見ると、奄美大島は奄美諸島の一つで薩南最大の島と紹介されている。奄美諸島について「南の沖縄文化と北の大和文化の接点として、文化的にきわめて、エキゾチックな面を持っている。と同時に、南の島特有の、澄んだ海、色彩豊かなサンゴ礁、どこまでも続く遠浅の白砂の浜、熱帯林など、南国の情緒を、心ゆくまで堪能させてくれる」(p. 185) とし、奄美大島については「伝統的な大島鮎と、栄養価満点なハブ料理で知られる奄美最大の島」(p. 185) としながら、近代的な都市としての名瀬やソテツの群生、湯湾岳などを取り上げている。また、加計呂麻島も奄美大島とは独立してまとめられており、「古い習慣や、民芸を残し、無人の小さな島々を含めて、素朴で神秘的なムードのあるところだ」(pp. 186-187) としている。また、1978 年 6 月の記事では、鹿児島から奄美大島、徳之島と沖永良部島を経て与論島へのフェリーでの旅が紀行文として写真とともに掲載されている (pp. 94-99)。

以上より、奄美大島は離島ブームの中で奄美群島として捉えられることが多く、いわゆる“南の島”というイメージで盛んに捉えられていたことがわかる。一方で、奄美大島は魅力としてサンゴ礁などの海に加え、大島鮎などの文化的側面も大きく取り上げられる傾向にあったこともうかがえる。

2 期(1985-1994)：記事数は 5、ページ数は合計 24 ページ確認できた。1 年あたりの記事数は 0.5 記事、ページ数は 2.4 頁であり、1 期よりも記事数、ページ数共にわずかに減少している。

1985 年には 2 つのエッセイがみられ、それぞれ奄美のシマウタ、喜界島の海の幸に関するものであった。奄美大島への入込客数が大きく増加する時期でもある 1989 年の記事を見る。1989 年 2 月のカラーグラフでは奄美大島について次のようにある。「豊かな自然に恵まれた常夏の島には、サンゴの石垣や茅葺きの高倉、古くからの信

仰や民俗芸能など、様々な伝統文化が守り伝えられてきた。そこは、日本の原郷である。」(pp. 44-50) トップの写真は集落にある土俵であり、他の写真は黒糖工場、泥染めの様子、島唄や踊りなど奄美大島の文化を中心としたものとなっているが、最後に 1 ページ分ビーチとリゾートホテルの写真が含まれている。今回確認した「旅」の記事でリゾートホテルの写真が掲載されるのはこの年が初であった。また、1994 年 6 月の紀行文では加計呂麻島の伝統的な踊りの諸鈍シバヤ、島歌に歌われている物語等を取り上げている (pp. 155-161)。

以上より、奄美大島の固有の伝統文化が中心に取り上げられる傾向にあることがうかがえる。また、いわゆるリゾート地としてのイメージも存在していたと推測できる。

3 期(1995-2010)初期：記事数は 5、ページ数は合計 30 ページ確認できたが、2004 年までの発行分を対象とし 3 期として情報が不十分であるため、3 期初期の特徴として読み取る。

記事の内容に注目すると、1997 年 3 月の記事では、トップの写真として見開き 2 ページを使って名瀬市金作原原生林が掲載されている。リード文には次のようにある。「東洋のガラパゴスと呼ばれ、珍しい動植物が棲む事でも知られる奄美大島。有数の濃密さを持つ亜熱帯植物や国指定天然記念物のオオストンオオアカゲラ、そして生態すらよくわかっていないアマミノクロウサギ。地元の写真家と訪ね歩いた不思議がいっぱいのこの森は、島で一番美しいところではないかと思った。」(pp. 8-14) また、1998 年 12 月の記事も同様に、金作原原生林の写真に始まる特集が組まれている (pp. 40-48)。

以上より、1 期 2 期ではあまり見られなかった奄美大島の金作原原生林を中心とした森林資源の魅力が、3 期にはその魅力が大きな写真とともに紹介され、“海以外”の自然が注目されるようになっていくことがうかがえる。

3-2 雑誌「るるぶ」にみる奄美大島の観光イメージと観光活動

前節では、雑誌「旅」を用いて 1 期、2 期および 3 期初期の奄美大島における観光イメージと観光活動の特徴を把握したが、残りに当たる 3 期、4 期について「旅」では把握することができない。したがって、3 期、4 期については、3 期初期にあたる 1997 年からほぼ毎年改訂版が発行されている観光ガイドブック「るるぶ情報版 屋久島奄美種子島」(以下、「るるぶ」)を用いて分析する⁹⁾。

「るるぶ」は「旅」と異なり、その土地の観光情報について網羅的に取り上げる特徴を持つため、一冊の構成にみる内容の強弱からその特徴を読み取ることとする。ここでは雑誌の構成として、奄美大島に関する特集内容、ページ数、掲載の順番に注目して分析する。「るるぶ」にみる奄美大島の特集は大きく、ダイビングやサーフィンをはじめとするマリレジャー(M)、原生林の散策や野生動物の観察を行う森林での体験(N)、泥染めや島唄などの文化体験(C)に分けることができるため、その他(O)も併せて特集を 4 つに分類¹⁰⁾し、各号について特集の種類と掲載の順番がわかるように示した(Table3)。

「るるぶ」の構成の特徴として、1997 年から 2002 年に発行された 4 冊については、掲載された各島を“南の島”での観光として総合的に扱った編集であった。2003 年以降には奄美大島と屋久島がそれぞれ独立した形で扱われるようになり、特集も屋久島と奄美大島でそれぞれ組まれるようになる。全体を通して各特集は 2 ページが多くみられ、見開き構成となっていることがわかった。見開き 2 ページを特集の基本ページ単位と考えると、4 ページ以上扱われる場合

Table 2 List of Articles Including the Word “Amami” in the Title from the Travel Magazine “Tabi” (1970-)

	Year of issue	Month	Titles of articles	Pgs.
Period I 1970-1984	1970	3	Newest Information of Kyushu, 1970; Floating Islands in the Satsunan Region; Yaku-shima, Tokara Archipelago, Amami Oshima, Tokunoshima, Yoron-jima, and Okinoerabu-jima	2
		2	Special Gravlure: Islands in Amami; Four Landscapes on Four Islands	7
	1971	2	Special Guide: South Kyushu, Okinawa, and Amami Oshima	1
		6	Special Guide: Allure of Southern Islands; Islands in Satsunan Region; Model Course for Island Hopping; Amami Oshima, Tokunoshima, Kikai-jima, Kakeroma-jima, Okinoerabu-jima, Yoron-jima and Others	4
	1972	6	Special Guide at the End of the Book: Allure of the 70 Islands of the Entire Country; Amami Oshima, Tokunoshima, Okinoerabu-jima, and Yoron-jima	1
		10	Local Performing Arts and Cultural Properties in the Entire Country that Should Be Conserved; The Saimyo-ji Three-Story Tower (Tochigi) and Amami's Hachigatsu-Odori (Kagoshima)	1
		12	Local Performing Arts and Cultural Properties in the Entire Country that should be Conserved; Aozasa's Shika-Odori (Iwate) and Amami's Takakura (Kagoshima)	1
		6	Trip to the Southern Islands; Touring the Satsunan Islands by Ship; Leaving the Port of Kagoshima and Heading for the South; A Record of the Joy of a Boat Trip and Island Climate via Amami and Yoron to Naha	20
	1978	6	Special Guide "Go To Island"; From Rishiri to Okinawa; An Attractive Island that Makes People Want to Go; From Early Summer to Midsummer; Coral Islands with Subtropical Forests; Satsunan Islands, Amami Oshima and Okinoerabu-jima	3
		1	Essay; This Trip; Folksong "Shima-uta" of Amami	2
Period II 1985-1994	1985	6	Essay; This Trip; Seafood of Amami Color Gravlure; Amami; Trip to Southern Island Special Topic; The Dreaming Story of Amami's Folksong "Shima-uta"	1
		2	Color Gravlure; Amami; Trip to Southern Island	7
	1989	2	Special Topic; The Dreaming Story of Amami's Folksong "Shima-uta"	7
		6	Serial Article; Trip of My Heart Vol. 2; Amami, the Island Where Gods Play	7
	1997	3	Special Trip; Amami Oshima, Forest of Wonder	7
Period III 1995-2010	1998	12	Special Article; Enjoyable Trekking in the Low Mountains; Amami Oshima, Art Museum of Subtropical Forest	9
		12	Special Article; Enjoyable Trekking in the Low Mountains; Amami Oshima, Art Museum of the Subtropical Forest	1
	1999	8	Serial Article; My 10 Books on Travel Vol. 31; "Books on Amami" chosen by Teruyuki KOBAYASHI	6
		12	Trajectory of "Amami University of Freedom" for the First Year; Morning Sunlight was Leaking through the Tough Branches of the Deigo Tree in Shodon; Go to the Island of Bullfighting; Tokunoshima in Amami Goes Crazy for Bullfighting.	7

は意識的に強調された特集であると考えられる。

3 期(1995-2010)：前半にあたる 1997 年から 2002 年については前述のように奄美大島単独での特集はあまりみられないが、その他(以下 O)を除く、奄美大島単独での特集となっているものはいずれもネイチャーアクティビティ(以下 N)となっていることがわかる。内容としては「森を歩き、マングローブをゆく 自然満喫エコツアー」(1999)、「ジュラシックパークの世界が目の前に広がる 金作原原生林ツアー」(2002)とあり、マングローブと金作原原生林でのアクティビティに注目している。これより、3 期前半には奄美大島の観光地としてのイメージは森林資源を活かした体験というものがあったと考えられる。これは前節の分析結果とも一致する。また、O について特集の内容をみると、「奄美に魅せられた孤高の日本画家 田中一村の世界」(1997)、「亜熱帯の自然を描いた日本画家田中一村の足跡を訪ねて」(1999)のように、奄美の自然を描いた日本画家田中一村を特集したものがみられるのも特徴である。これは、2001 年オープン予定の奄美パーク内の施設として田中一村記念美術館ができることに合わせたものとみられ、「奄美諸島の魅力をぎゅっと圧縮!! 奄美パーク徹底特集」(2002)とあるように、奄美大島の新しい観光スポットとして奄美パークに注目が集まっていたことがうかがえる。

次に 3 期の 2003 年以降についてみる。マリンアクティビティ(以下 M)、ネイチャーアクティビティ(N)、カルチャーアクティビティ(以下 C)の掲載の順番に注目すると、M と N が 1 番目、2 番目に掲載され、C が 3 番目に掲載されるパターンが継続している。ページ数は N、M とともに 2 ページがほとんどであり、2003 年から 2010 年までの M と N の掲載の順番は M→N が 6 回、N→M が 2 回確認できる。C についても「奄美で文化体験!」(2006)、「島カルチャー編 島文化にどっぷり浸かる 島に入ったら島人になれ!」(2010)のように、M や N に劣らず、“文化”という切り口から取り上げられていることがわかる。したがって、M をメインに紹介しながらも N、C についてバランスよく注目していた時期であると言える。

4 期(2011-2018)：2011 年(2010 年)から連続して最初に登場する特集が O になっていることがわかる。これらの内容は「奄美でしたい感動体験! Best1 “素”の奄美に出よう! 美ら海ドライブ」(2013)、

「1day アイランドドライブ」(2017)などのように、奄美大島の各見所を自動車めぐりスタイルの提案となっている。ドライブのコースは奄美空港をスタートし、笠利・龍郷町を中心にまわる大島北部コースと、名瀬をスタートし、住用・瀬戸内町を中心にまわる大島中南部コースが紹介されている。立ち寄り場所は定番の景勝地や施設、新しくオープンした飲食店等を中心に網羅的に取り上げていることがうかがえる。2014 年以降については LCC の参入を背景にレンタカー利用者の増加もみられるため^{注 11)}、観光活動の実態に適合した特集であると考えられる。次に、M と N の順番をみると M→N が 5 回、N→M が 2 回確認できる。また、N のページ数に注目すると 4 ページある年が 4 回(2012、2015、2016、2017)確認でき、「東洋のガラパゴス 太古の森のアクティビティ」(2105)などとある。N→M の順に取り上げられているものは 2015 年、2016 年であり、この順番での取り上げられ方は 3 期 2006 年以降のものであることがわかる。ページ数も 4 ページあるため、この時期には N への注目度が高かったことがうかがえる。C については、連続して特集が確認できない年もあり消極的になっているようにみられるが、2015 年から 2017 年には再度取り上げられていることがわかる。

3-3 3 章まとめ

以上より、各期について観光雑誌が提示する奄美大島の観光イメージ及び観光活動の特徴は次のように言える。

「旅」によると、1 期は離島ブームの中で“南の島”というイメージで盛んに捉えられた一方で、海という魅力に加え大島紬などの文化的側面も大きく取り上げられる傾向にあった。2 期は奄美大島の固有の伝統文化が中心に取り上げられる傾向にあったと同時に、いわゆるリゾート地としてのイメージも存在していたことが窺える。

「るるぶ」によると、3 期は初期には森林資源を活かした体験や、新しい観光施設に注目した構成となったが、その後は各種体験を中心にバランスよく注目された。なお、ここでみられた森林資源への注目といった特徴は「旅」にみられた 3 期初期の特徴とも一致するものであり、森林資源への注目は 2 期から 3 期における観光イメージの変化の特徴として捉えられる。4 期はドライブによる島内の網羅的な観光活動が提示されるほか、2015 年以降は再度森林資源への注目が高まることがわかる。

さらに、2 章において「奄美群島の概況」から読み取った奄美大島における観光活動の実態及び施策の方針と、本章において明らかにした観光雑誌によって提示された奄美大島における観光イメージ及び観光活動の特徴から、各期を次のように命名した。

「南国離島観光期」(1 期:1970-1984):海洋性レクリエーション基地として期待され、“南の島”というイメージが先行している。

「南国リゾート構想期」(2 期:1985-1994): 南国固有の文化を有するというイメージの一方で、沖縄のリゾート開発を意識し、ゴルフ場やリゾート開発に注目が集まる。

「観光多様化期」(3 期:1995-2010):消費者ニーズの多様化を背景に、マリンレジャーのみならず森林や文化などの資源を活かした体験型観光の推進や観光施設の整備が相次ぐ。

「世界遺産推進期」(4 期:2011-2018):世界自然遺産登録と個性的な観光地を目指し、LCC 就航に伴う客層の拡大と観光活動の場の広域化がみられる。

Table 3 The Variety of Featured Articles in the Guidebook “Rurubu” and Their Order of Publication

	Year of issue	Order of Publication									
		①	Pgs.	②	Pgs.	③	Pgs.	④	Pgs.	⑤	Pgs.
Period III 1995-2010	1997	O	2	O*	3	M*	3	N*	1	O*	2
	1999	N	1	C	1	M*	1	O	2	O	1
	2001	C*	2	N*	3	M*	2				
	2002	O	2	C*	2	N*	3	N	2		
	2003	M	2	N	1	N	1	O	2		
	2004	M	2	N	2	C	2	O	2		
	2005	N	2	M	2	C	2	O	2		
	2006	N	2	M	2	C	2	O	1	O	1
	2007	M	2	N	2	C	1				
	2008	M	2	N	2	C	2	O	2		
Period IV 2011-2018	2009	M	2	N	2	O	2	C	1	O	1
	2010	O	2	M	2	N	2	C	2		
	2011	O	4	M	2	N	2	C	1		
	2012	O	4	M	2	N	4	C	1		
	2013	O	4	M	2	N	2				
	2014	O	4	O	2	N	2				
	2015	N	4	O	2	M	2	C	2		
	2016	O	4	N	4	M	2	C	2		
	2017	O	3	O	1	M	2	N	4	C	2
	2018	O	3	O	1	N	1				

M: Featured Articles Related to Marine Activities such as Diving, Sea Kayaking, and Surfing N: Featured Articles Related to Activities in Mountains and Rivers such as Trekking into the Native Forest, Canoeing, and Observing Wildlife C: Featured Articles about Cultural Experiences such as Mud Dyeing of Kimonos and Folk Songs O: Other Featured Articles
* Combined Featured Articles Regarding Areas Other than Amami Oshima Island (e.g., Yaku Island)

4. 奄美大島における宿泊施設の変遷

本章では主に「奄美群島の概況」および電話帳を用い、奄美大島における宿泊施設について、件数、種類、立地の変化を明らかにする。さらに、近年(2018-2019)の宿泊施設の実態を地域別の件数と規模による分類から把握する。

4-1 宿泊施設の件数にみる変化

最初に、1970年から2018年の奄美大島における総宿泊施設数の変化より、減少傾向から増加傾向に転じる直前である1986年、1996年、2015年の3カ所で区分することでAからDの4つに時代区分を行なった(Fig. 2)。その後、C期については入込客数による時代区分(2章)も踏まえてC1期(1997-2010)とC2期(2011-2015)に区分できると解釈した。よって、本章の分析はA期(1970-1986)、B期(1987-1996)、C1期(1997-2010)、C2期(2011-2015)、D期(2016-2018)の5つの時代区分を基に行う。

まず、A期からD期の各期について、7地域別の宿泊施設数の変化から特徴をみる(Fig. 3^{注12)})。

A期(1970-1986)：期を通して宿泊施設数が最大の地域は名瀬であることがわかる。総宿泊施設数における1973年から1980年の増加は、瀬戸内町と笠利の宿泊施設数増加によるものであることがわかる。1980年以降の総宿泊施設数の減少傾向は主に名瀬と笠利の宿泊施設数の減少であると読み取れる。一方、この時期の龍郷町、大和村、宇検村、住用の宿泊施設数は比較的少なく大きな変化はみられない。

Fig. 2 Change in Number of Accommodations

*The data of Kasari, Naze, and Sumiyo after 2006 are Cumulative Number of Permitted Accommodations.

Fig. 3 Change in the Number of Accommodations by Area (prepared using the "Fact Sheet of Amami Island Group")^{注12)}

B期(1987-1996)：大きな変化として総宿泊施設数が期中ピークとなる1989年頃に、名瀬と瀬戸内町の宿泊施設数が逆転したことで7地域の中で瀬戸内町が宿泊施設数最大となっている。また、名瀬の宿泊施設数は、ほぼ一定の割合で減少していることがわかる。笠利は概ね横ばい傾向にあり、龍郷町、大和村、宇検村、住用の宿泊施設数も同様だが、1990年以降は若干の減少傾向がみられる。以上より、期中前半の総宿泊施設数の増加傾向と1990年以降の減少傾向はそれぞれ各地域の若干の増加と減少の傾向と対応していると言える。

C1期(1997-2010)：総宿泊施設数は2007年まで増加傾向にあり、その後減少傾向になるが、期全体としては増加していることがわかる。瀬戸内町は期中増加傾向にあり、7地域中最大の宿泊施設数となっている。B期で減少傾向にあった名瀬の宿泊施設数は2004年から増

Fig. 4 The Number of Permitted Accommodations under the Hotel Business Act (offered by Amami City Office)

Fig. 5 The Number of Accommodations Listed in the Telephone Directory

Fig. 6 The Transition of Rates of Listed Accommodations by Type in the Telephone Directory

加傾向に転じていることがわかる。さらに C1 期の大きな特徴として、A 期 B 期で少数横ばい傾向にあった龍郷町の宿泊施設数が増加傾向に転じていることがある。また、2000 年ごろ大和村では若干の宿泊施設増加がみられる。

C2 期 (2011–2015)：笠利、名瀬、住用はデータの性質が異なり宿泊施設数の減少は捉えられないことに注意する。宿泊施設数が比較的多い名瀬、瀬戸内町、笠利、龍郷町の 4 地域について、毎年約 1 から 3 件宿泊施設の登録があることが分かる。また、総宿泊施設数の減少は主に瀬戸内町の宿泊施設数減少が影響していると考えられる^{注 13)}。残りの 3 地域の宿泊施設については新しい登録が増えている傾向はみられない。

D 期 (2016–2018)：瀬戸内町、名瀬、笠利、龍郷町の宿泊施設数は C1 期 C2 期と比較して、宿泊施設の登録数が大幅に増加をしていることがわかる。大和村、宇検村、住用についても同様に D 期に入り若干の増加がみられる。

4-2 宿泊施設の種類にみる変化

次に、宿泊施設の種類に注目した分析を行う。1970 年から 2018 年の宿泊施設に関して、旅館業法における種別の「旅館・ホテル」と「簡易宿所」の件数をみると 2000 年以降の簡易宿所許可件数の増加が顕著であることがわかる (Fig. 4)。したがって、2000 年以降顕著に、いわゆる民宿やゲストハウスのような小規模な宿泊施設が増加していることが考えられる。

続いて、経年的に宿泊施設の種類の変化を把握するために電話帳を用いた分析を行った。電話帳に掲載された宿泊施設は、いくつかの種類に分類されており、これらの分類は各宿泊施設の認識によるものであり明確な定義はないが、当時の宿泊施設の傾向は概ね把握可能であると考えられる。ここでは、簡易宿所の増加を踏まえ、各年の電話帳に掲載されている宿泊施設の種類から「ホテル・旅館」、「民宿・ペンション」、「公共宿舎・保養所」、「その他」の 4 つに大分類^{注 14)}して分析を行った。

Fig. 5 より、電話帳掲載宿泊施設数の変化は 1982 年と 2003 年を頂点とする 2 つの山を持っており、Fig. 2 の総宿泊施設数の変化における増減の頂点 1980 年、2007 年と概ね対応していることが確認できる。しかし 2006 年以降、電話帳に掲載された宿泊施設数は減少しており、より宿泊施設数の実態を反映していると考えられる「奄美群島の概況」にみる宿泊施設数との乖離が大きくなる傾向がある。これは、宿泊施設への問い合わせ方法がインターネット主流になってきたことなどから、電話帳への掲載をしていない施設が増えてきたことが要因と予想できる。これを踏まえ、宿泊施設の種類の変化を構成割合でみる (Fig. 6)。

A 期から B 期にかけて「ホテル・旅館」の割合は 74% から 52% までほぼ一定の割合で減少し、それに伴って「民宿・ペンション」の割合は 21% から 45% まで増加していることがわかる。次に **C1 期**をみると、2000 年に「民宿・ペンション」の割合が初めて 50% に達し、同時に「ホテル・旅館」の割合を上回っている。よって、C1 期は宿泊施設の種類構成が転換した時期であると言える。それ以降はわずかに「民宿・ペンション」の割合が大きいものの両者 50% 前後の割合で推移している。**C2 期**の「その他」の種類の内訳について、2012 年は「その他」6 件中 3 件が「賃貸マンション」、1 件が「貸別荘」であり、2015 年は「その他」5 件中 2 件が「賃貸マンション」、2 件が「貸別荘」となっ

おり、貸別荘、賃貸マンションのような自炊を主とする宿泊施設の形態が登場していることがうかがえる。最後に **D 期**では「民宿・ペンション」の割合がさらに増加していることがわかり、「ホテル・旅館」の割合は 40% を下回っている。なお、2018 年の「その他」については 6 件中「賃貸マンション」2 件、「貸別荘」3 件となっている。

4-3 宿泊施設の立地にもみる変化

本節では、各期 (A, B, C1, C2) について^{注 15)}、電話帳に掲載された宿泊施設の立地の様子を把握した。ここでは、前節の大分類による「ホテル・旅館」と「民宿・ペンション」について、特に特徴的な立地の変化がみられた時期に注目した。

A 期 (1979)：「ホテル・旅館」は名瀬の中心市街地と瀬戸内町の中心市街地である古仁屋に集中していることが分かる (Fig. 7)。

B 期 (1988)：「ホテル・旅館」は A 期ほどの中心市街地への一極集中はみられなくなるが、依然として名瀬中心部への集中がうかがえるほか、主に龍郷町、笠利に分布していることがわかる (Fig. 7)。また、「民宿・ペンション」は広く全域に立地しており、特に加計呂麻島 (瀬戸内町) と笠利全域に多く立地している (Fig. 8)。

C1 期 (2003)：「民宿・ペンション」が奄美大島南部の瀬戸内町の加計呂麻島、請島、与路島まで立地し、北部では龍郷町北部地域まで立地するようになることがわかる (Fig. 8)。

C2 期 (2012)：掲載宿泊施設数は減少しているものの、立地の特徴は C1 期と大きな差はみられなかった。

次節では D 期に相当する近年の宿泊施設について、その立地の特徴も含めて把握する。

4-4 近年の宿泊施設の実態

本章最後に、D 期に相当する近年 (2018–2019) の宿泊施設の実態を明らかにする。ここでは電話帳掲載の宿泊施設に加え、各市町村および、あまみ大島観光物産連盟の HP に掲載された宿泊施設^{注 16)}について、客室数と客室の態様が確認できたもの 160 件を対象とした。

Locations of Hotels and Ryokans in Period A (1979) Locations of Hotels and Ryokans in Period B (1988)

Fig. 7 Location of Hotels and Ryokans (Japanese Traditional Style Inn)

Locations of Guesthouses and Resort Inns in Period B (1988) Locations of Guesthouses and Resort Inns in Period C1 (2003)

Fig. 8 Locations of Guesthouses and Resort Inns

対象とする宿泊施設を客室数およびその客室の態様に注目し、Table4のように規模の観点から分類した。

客室数9以下となる小規模宿泊施設には、オーナーが宿泊場所に常駐せずに、建物単位で貸し出される「一棟貸タイプ」が49件(31%)、それ以外の宿泊施設にあたる「民宿ゲストハウスタ입(以下、民宿GHタイプ)」が83件(52%)みられ、これらは全体の80%以上を占めていることが分かった。

一方、客室数10以上となる中規模以上宿泊施設には、シングルルーム・ワンルームを主とする「ビジネス特化タイプ」が14件(9%)、ツイン・ダブルルームを主とする「観光特化タイプ」が14件(9%)みられた(Table5, Fig. 9)。次に、各宿泊施設タイプの特徴を概観する。

【小規模宿泊施設】

一棟貸タイプ：一棟貸タイプの宿泊施設は全4タイプのおよそ30%を占めており、笠利に最も多く立地し、特に海沿いに多いことがわかる。笠利は2013年以降宿泊施設数が大幅に増加している地域でもあるため、近年の状況をみると笠利では一棟貸タイプの宿泊施設が増加したと推察できる。一棟貸タイプは民宿GHタイプと比べてオーナーとの直接的な交流が少ないとみられ、宿泊客にとってプライベートが保たれることも特徴の一つと言える。また、集落内の一軒家を一棟で貸す形態のものも見られ、奄美で暮らす擬似的な体験の提供になっていると考えられる。

民宿ゲストハウスタ입：民宿GHタイプの宿泊施設の割合は全体の50%を超え、最も多い宿泊施設のタイプである。瀬戸内町に最も多く、次いで名瀬に多い。瀬戸内町では特に加計呂麻島まで立地しており、一棟貸タイプも合わせてみると密集せず分散した立地になっていることがわかる。これは、昔の奄美の姿が残ると言われている加計呂麻島を楽しみたいという観光客の需要や、オーナーの開業意図があると考えられる。民宿GHタイプは一棟貸タイプとは異なり、宿泊客とオーナーの距離が近いことも特徴であり、奄美の住民と宿泊客の交流に価値を見出しているタイプとも言える。

また、このタイプにはウィークリーマンションのような事例や、コテージやペンションのような施設を複合的に持った宿泊施設もみられ、多様な形態が確認できるのも民宿GHタイプの特徴である。

【中規模以上宿泊施設】

ビジネス特化タイプ：ビジネス特化タイプの宿泊施設の割合は全体の9%となっている。これらのタイプの多くは、いわゆるビジネスホテルであり、食事ができる空間を備えている。したがって、そのような需要が旺盛な奄美群島の中心都市である名瀬中心部と奄美大島南部の都市である瀬戸内町古仁屋に立地していることが確認できる。また、奄美大島の宿泊施設としては最大規模である客室数が100を超える施設がこのタイプに全て含まれるため、奄美の観光において大きな収容力を担っていると考えられる。

観光特化タイプ：観光特化タイプの宿泊施設の割合は全体の9%となっており、いわゆるリゾートホテルが多く含まれるタイプである。龍郷町と笠利に集中していることがわかり、いずれも海を望む立地となっている。他にも、比較的規模の大きいゲストハウスに類する施設や、ヴィラやコテージのような形態もみられ、グループでの観光に対応できる宿泊施設タイプであると言える。

4-5 4章まとめ

本章では、奄美大島における宿泊施設の変遷を件数、種類、立地

の観点に注目し、次の内容を明らかにした(Table 6)。①宿泊施設数の変化には7地域ごとに特徴がみられる。②宿泊施設の種類に注目すると2000年ごろから「民宿・ペンション」の割合が全体の50%以上を占めるようになる。③宿泊施設の立地は、1970年から2000年にかけて名瀬や瀬戸内町古仁屋といった中心都市に集中した宿泊施設が減少し、2000年以降には、龍郷町北部や諸島、与路島に「民宿・ペンション」が立地するようになる。④近年の宿泊施設においては小規模宿泊施設が全体の約80%を占め、地域と結び付くことで観光客に対して奄美で暮らす擬似的な体験を与えるものなど特色のある施設がみられる。

5. 観光イメージ及び観光活動の変遷と宿泊施設の関係

本章では、観光活動の実態及び施策の方針(2章)、観光雑誌によって提示された観光イメージ及び観光活動の特徴(3章)と、宿泊施設の変遷(4章)の関係について、その背景・要因を考察する。

Table 4 Classification of Accommodations

Accommodations Used in Analysis 160件			
Up to Nine rooms (incl. Bed Only)		10 rooms and over	
小規模宿泊施設 Small Accommodation 132件(83%)		中規模以上宿泊施設 Middle-sized Accommodation 28件(18%)	
一棟貸タイプ Rental Vacation House Type 49件(31%)	民宿GHタイプ Guesthouse Type 83件(52%)	ビジネス特化タイプ Business Type (Specialized for Business) 14件(9%)	観光特化タイプ Leisure Type (Specialized for Leisure) 14件(9%)
The Owner Does Not Reside There, and the House is Exclusively Rented to Each Group.	Small Accommodations other than Rental Vacation House Types	Rooms are Mainly Single Rooms	Rooms are Mainly Twin or Double Rooms

Table 5 Locations of Accommodations in Recent Years (2018-2019)

Area	Number of Accommodations in Total	Number of Accommodations Used in Analysis	一棟貸 Rental Vacation House	民宿GH Guesthouse Type	ビジネス特化 Business Type	観光特化 Leisure Type
Naze	54(23%)	35(22%)	4	19	10	2
Sumiyo	7(3%)	5(3%)	1	4	0	0
Kasari	64(28%)	48(30%)	31	13	0	4
Tatsugo	29(13%)	22(14%)	3	13	1	5
Yamato	8(3%)	6(4%)	2	4	0	0
Uken	4(2%)	3(2%)	1	0	0	2
Setouchi**	65(28%)	41(26%)	7	30	3	1
Total	231(100%)	160(100%)	49(31%)	83(52%)	14(9%)	14(9%)

*The Cell in Gray means the highest number in each type.

**Koniya is located in Setouchi

Fig. 9 Locations of Accommodations in Recent Years (2018-2019)

5-1 観光イメージ及び観光活動の変遷と宿泊施設の関係

2章および3章の時代区分における1期(「南国離島観光期」)は宿泊施設の変遷のA期に、以下同様にして2期はB期に、3期はC1期に、4期はC2期とD期にそれぞれ対応すると捉え、各期における観光イメージ及び観光活動の特徴と宿泊施設の関係のみをみた(Table6)。

(1)「南国離島観光期(1970-1984)」と宿泊施設の関係

「南国離島観光期」は、いわゆる“南の島”という観光地イメージや、地元新聞社による「奄美十景」の設定や海洋性レクリエーション基地としての期待からもわかるように、観光客の過ごし方は景勝地訪問や海水浴が中心であったことがうかがえる。また、奄美大島の固有文化が取り上げられるも、南国情緒といったエキゾチシズムの中で捉えられる傾向があり、「奄美大島ならでは」という観光イメージの意識は比較的低かったと考えられる。

宿泊施設についてみると、瀬戸内町と笠利が大きく件数を伸ばしている。名瀬は7地域中最大の宿泊施設数を保ちながらも期の後半は減少傾向になり、笠利は1974年ごろに大きく件数が増加している。宿泊施設の種類としては「ホテル・旅館」が割合としては大きく、その立地はそれぞれ港のある名瀬中心市街地と瀬戸内町中心市街地に集中している。一方、「民宿・ペンション」は笠利に集中していることがわかる。これは、離島ブームの延長上で観光拠点として便利な中心市街地(名瀬、古仁屋)や、“南の島”における“海”という観光イメージと海水浴などの観光活動に対して、大島海峡のある瀬戸内町や、砂浜と空港がある笠利^{注17)}が宿泊場所として適合していたことが影響していると考えられる。また、観光客が奄美の文化を享受できる主な場として、民宿がその機能を果たしていたと考えられる^{注18)}。

(2)「南国リゾート構想期(1985-1994)」と宿泊施設の関係

「南国リゾート構想期」は、前期から継続した“南の島”というイメージに、沖縄のリゾート開発を意識した観光イメージが加わったことがうかがえる。期の当初にあたる1988年の奄美空港でのジェット機運用開始は、入込客数の増加とそれを見据えた宿泊施設の開業をほぼ同時期に引き起こしたと考えられる。また、観光の概況よりツアー客やゴルフ客が増加したことがうかがえる。

宿泊施設についてみると、期中の名瀬における宿泊施設数は減少し、瀬戸内町の宿泊施設数は増加していることがわかる。それにより1990年には宿泊施設数が最も多い地域が名瀬から瀬戸内町に入れ替わっている。「ホテル・旅館」の立地は名瀬と瀬戸内町の中心市街地に集中しているが、「南国離島観光期」と比べて件数は減少した。これは、観光拠点となる中心市街地においてツアー客やゴルフ客へ向けた比較的収容量が大きい宿泊施設ができるとともに、従来の旅館や民宿など比較的小規模な宿泊施設が減少していったことが原因であると考えられる。一方、「民宿・ペンション」は笠利に立地しているほか、瀬戸内町加計呂麻島に増加している。これは、依然として“海”といった観光イメージが影響していたことが要因であると考えられるほか、前期から引き続いて伝統文化を享受できる場としても機能していたためと推察できる。

(3)「観光多様化期(1995-2010)」と宿泊施設の関係

「観光多様化期」は、消費者ニーズの多様化に対応できるように各種観光施設の充実が図られた他、エコツーリズムや癒しをテーマにした観光イメージ及び観光活動など、景勝地などへの訪問に止まら

ない“体験”に焦点を当てた観光イメージ及び観光活動が中心となった。同時に、これまでの南国イメージの中心となっていた“海”以外にも観光資源としてマングローブや原生林を代表とする海以外の自然、“森林”に注目が集まるようになった。さらに、期の後半にあたる2007年には奄美市で「一集落1ブランド事業」が開始され、これは奄美の集落文化を個性的な地域の資源として発信する動きであり、次の期にあたる「世界遺産推進期」の観光の概況にみられた「豊かな地域資源を有効に活用」などにも通じる事業と捉えられる。こうした動きは本期の当初にみられた海や森林をフィールドとする観光活動とも異なる新しい観光活動の兆しと言える。

宿泊施設についてみると、名瀬の宿泊施設数と龍郷町の宿泊施設数が増加に転じていることが特徴と言える。名瀬の宿泊施設数の増加は、「奄美パーク」(2001.9開業、笠利)やカヌー体験ができる「マングローブパーク」(2001.7開業、住用)など、ガイドブックでも取り上げられる大型観光施設のオープンによる需要拡大を見据えたものであると考えられる。宿泊施設の種類についてみると、C1期(1997-2010)には、「ホテル・旅館」の割合を「民宿・ペンション」が上回った。「民宿・ペンション」は笠利、瀬戸内町加計呂麻島のほか、龍郷町北部や、瀬戸内町与路島、請島にも立地した。龍郷町北部に関して言えば、ソテツ・パショウの群生地がある他、1995年には「奄美自然観察の森」がオープンし、森林資源を活用した観光活動への移行が見られた。「民宿・ペンション」の立地エリアの拡大には、こうした観光活動の多様化が背景にあると考えられる。

以上のように新たな観光活動が登場し多様化することで、観光客が宿泊する主な地域(以下、宿泊エリアとする)にも変化が現れ、「民宿・ペンション」を中心とした小規模な宿泊施設が展開し始めたことが推察される。

(4)「世界遺産推進期(2011-2018)」と宿泊施設の関係

「世界遺産推進期」は、前の期から自然体験型の観光活動が継続する中で、世界自然遺産登録へ向けた機運がより高まった時期である^{注19)}。それに伴い森林資源を活用した体験型の観光がより注目されるとともに、国立公園の指定(2017)においては管理の方針として「環境文化型^{注20)}」を掲げ、奄美における自然と共生してきた文化も重要視している。また、大きな変化としてLCC(格安航空会社)の就航や航空航路運賃の軽減(2014)があり、これによる奄美大島への入込客数の増加と客層の拡大がある。前期末にあたる2010年からは、体験型観光の推進として着地型・体験型のプログラム企画である「あまみシマ博覧会」も開催され始め、前述の「一集落1ブランド事業」などとも併せて、“集落文化の体験”とも言える新しい観光イメージ及び観光活動が登場した。同時に、各地に増加しつつある観光スポットへ個人がレンタカーで巡る観光活動が主流になってきたことで、海や森林などを中心に行われていた従来の体験型観光に加え、集落などにも観光活動が行われる範囲が広がったと考えられる。

宿泊施設については、C2期(2011-2015)には貸別荘や賃貸マンションといった種類の宿泊施設がみられるようになる。また、C2期からD期(2016-2018)にかけて宿泊施設の件数が大幅に増加した。種類では小規模宿泊施設が全体のおよそ8割を占め、立地に関しても住用、大和村、宇検村のようなこれまで宿泊施設が少数で推移してきた地域にも確認できるようになっている。これは、世界自然遺産登録の機運を背景に持つ入込客の増加及び客層の拡大と、海や森林

だけでなく集落にまで及んだ観光活動の多様化が影響していると考えられる。

5-2 5章まとめ

奄美大島における観光イメージ及び観光活動の変遷と宿泊施設の関係は、観光イメージの変化と観光活動の多様化による宿泊エリアの拡大に伴う、小規模宿泊施設の増加と展開としてみる事ができた。「南国離島観光期」には観光客が奄美の文化に触れる場所として、住民が営む民宿がその機能を主に担っていたと考えられるが、「南国リゾート構想期」に入ると、従来の民宿や旅館の減少により、奄美ならではの文化に必ずしも触れる必要の無い観光活動が選択肢として登場したと推察できる。「観光多様化期」から「世界遺産推進期」にかけては、奄美の世界自然遺産登録の機運の高まりを背景に、海を中心とした体験型の観光から森林資源を活用した体験型の観光への広がりが見られるだけでなく、「南国離島観光期」にみられた奄美大島の文化に触れるという観光イメージ及び観光活動が、集落文化の体験などとして回帰的に現れたとみられる。

よって、宿泊エリアの拡大にともない展開した小規模宿泊施設は、近年みられる地域ならではの資源に焦点を当てた集落文化の体験や集落歩きと言うような観光イメージ及び観光活動の中で捉えることで、奄美ならではの体験が可能となる“場”として機能すると考えられる。

6. 結論

本研究では、1970年から2018年の奄美大島における観光イメージ及び観光活動の変遷として「南国離島観光期」(1970-1984)、「南国リゾート構想期」(1985-1994)、「観光多様化期」(1995-2010)、「世界遺産推進期」(2011-2018)の4期に区分を行い、それぞれ特徴を明らかにした。宿泊施設の変遷としては地域ごとに施設数の変化に特徴がみられ、種類に注目すると2000年ごろから「民宿・ペンション」の割合が全体の50%以上を占めるようになり、その後立地のエリアを拡大しながら漸増し、近年(2018-2019)においては小規模宿泊施設が全体の約80%を占めることが明らかになった。また、それらには地域と結び付くことで観光客に対して奄美で暮らす擬似的な体験を与えるものなど特色のある施設もみられた。

観光イメージ及び観光活動の変遷と宿泊施設の関係をみると、自然体験や集落文化体験のような観光活動の多様化とともに主な宿泊エリアの拡大もみられた。特に小規模宿泊施設は観光活動の多様化のなかで奄美ならではの文化を体験させる“場”として機能する可能性が示唆された。

なお、本研究における「観光イメージ」と「観光活動」は奄美大島に限ったものである。全国的な観光における「観光イメージ」と「観光活動」とどのような関係があるのかを明らかにすることが今後の研究の課題として挙げられる。

Table 6 Transition of Tourism Images, Activities, and Accommodations in Amami Oshima Island

Table 6 Transition of Tourism Images, Activities, and Accommodations in Amami Oshima Island					
Period	Period of Southern Island Tourism (Period I)	Period of Envisaging a Tropical Resort (Period II)	Period of Diversification in Tourism (Period III)	Period of Promotion for Inscription on Natural World Heritage Site List (Period IV)	
Year	1970-1984	1985-1994	1995-2010	2011-2018	
Summary of Tourism (Ch. 2)	Amami Oshima Island had many natural beaches and was expected to be developed as a marine recreation base. Because of the economic depression after the oil crisis, changes in tourist demand, a boom in overseas travel, and the rapid growth of tourism in Okinawa, the number of tourists to the Amami Islands declined after 1981.	This is the period when Amami was aware of Okinawa's large resort development, and the fact sheet showed increased attention to tourism development, such as golf courses or resort hotels. There was an increasing number of tourists and golfers from the mainland of Japan resulting from the introduction of the jet airplane to Amami Airport.	Consumers' need for diversified and large tourist facilities in this area was enhanced, as by Mangrove Park and Amami Park. In addition, the necessity of promoting experiences and long-stay tourism through the appeal of natural and unique cultural resources began to be indicated.	Since the government decided to place Amami and the Ryukyu Islands on the tentative Natural World Heritage candidate list, efforts by locals and concerned organizations and groups for registration were expected.	
Characteristics of Tourism Appeared in Travel Guidebook (Ch. 3)	In the midst of the island travel boom, Amami was often understood as the "Southern Island" destination, while cultural aspects such as "Oshima-Tsumugi" textiles were frequently mentioned in articles along with the allure of the sea.	Though the articles tended to feature Amami's unique and traditional culture, it can be said that they conveyed an image of the resort area at the same time.	Although the articles focused on the experiences of forest resources and new tourist facilities in the early years, they later mentioned a variety of other kinds of experiences.	Exhaustive tourist activities throughout the island by car were proposed in the articles, and they again began to focus on forest resources from 2015.	
Period	A	B	C1	C2	D
Year	1970-1986	1987-1996	1997-2010	2011-2015	2016-2018
Number of Accommodation by Area (Ch. 4)	・Naze: Marginal Change→Decrease ・Setouchi: Increase ・Kasari: Increase→Slight Decrease ・Others: Marginal Change	・Naze: Decrease ・Setouchi: Increase ・Others: Marginal Change Number of Accommodations in Setouchi overtook that of Naze	・Setouchi: Increase ・Naze: Changed to Increase ・Kasari: Marginal Change ・Tatsugo: Changed to Increase ・Others: Slight Increase	・Setouchi, Naze, Kasari and Tatsugo: New Registration almost in each year ・Setouchi: Decrease (Data by Fact Sheet) ・Other 3 Areas: Marginal Change	・Setouchi, Naze, Kasari and Tatsugo: Large Increase in Registration ・Other 3 Areas: Slight Increase
Classification (Ch. 4)	H&R*: 74% → 62% G&Rl*: 21% → 35% *H&R: Hotel and Ryokan **G&Rl: Guesthouse and Resort Inn	H&R: 62% → 52% G&Rl: 35% → 45%	H&R: 50%→45% G&Rl: 47%→50%→49% Change in Composition of Types	H&R: 44%→43% G&Rl: 48%→48% Other: Increase in Rental Vacation House	H&R: 38% G&Rl: 52% Small Accommodations account 80% (Ch. 4)
Main Location (Ch. 4)	H&R: Central Naze and Koniya G&Rl: The Pacific Side of Kasari	H&R: Central Naze (Decrease) and Koniya G&Rl: The Pacific Side of Kasari, and Setouchi (Especially in Kakeroma Island)	H&R: Central Naze (Decrease) and Koniya G&Rl: The Pacific Side of Kasari, Northern Tatsugo, and Setouchi (Increment in Uke Island and Yoro Island)	H&R: Central Naze and Koniya G&Rl: The Pacific Side of Kasari, Northern Tatsugo and Setouchi	Small Accommodations were located also in Sumiyo (Ch. 4)

謝辞

資料提供、ヒアリング調査にご協力頂いた奄美市紬観光課・笠利総合支所・住用総合支所、瀬戸内町商工観光課、あまみ大島観光物産連盟の皆様に御礼申し上げます。

なお本研究は JSPS 科研費 26360060 および 18K11838 の助成を受けたものです。

注

注 1) 住宅宿泊事業法(民泊新法)施行, 旅館業法の改正(2018)

注 2) 本稿における観光イメージとは、その地域を訪れる観光客が、その地域で過ごす際に享受できると期待するイメージを言うこととする。

注 3) 本稿における観光活動とは、その地域において観光客が観光の一環として取る活動を言うこととする。

注 4) 政府は、「奄美・沖縄」の世界自然遺産登録を断念し推薦を一旦取り下げたが、現在 2020 年の登録を目指している。

注 5) 奄美大島は奄美群島最大の島であり、現在 1 市 2 町 2 村からなる。本研究では奄美市合併前の 7 地域(笠利・龍郷町・名瀬・住用・大和村・宇検村・瀬戸内町)を基に分析・考察する。なお、本研究では奄美市に属する 3 地域はそれぞれ笠利、名瀬、住用と表記している。

注 6) 発行年の制約により、1 期-3 期初期を「旅」、3 期と 4 期を「るるぶ」を用いて分析する。

注 7) 「旅」は 1924 年創刊の国内最古の歴史を持つ月刊発行の総合旅行専門誌である。雑誌の掲載情報にある程度の偏向があることは否めないが、国内最大手の(財)日本交通公社発行であることや 80 年間継続的に発行されてきたことから、当時の社会背景やニーズに大きく影響を受けていると考えられる。なお、2004 年からは発行元が新潮社へと譲渡され、それに伴いコンセプトも「女性向け」に変更されたため、本研究では総合旅行雑誌であった創刊の 1924 年から(財)日本交通公社版の最終号が発刊された 2004 年までのうち、文献 13)を参考に、研究対象となる 1970 年から 2004 年までに発刊されたものを用いた。

注 8) 日本交通公社旅の図書館の雑誌「旅」のデータベースにてキーワード「奄美」で検索および、国立国会図書館オンラインで確認した

注 9) 「るるぶ」は株式会社 JTB パブリッシングによって発行されている旅行ガイドブックであり、国内外ほとんどのエリアで毎年改訂版が発行されている。また、鹿児島県の島嶼部エリアのみで構成されるため詳細な情報を把握できること、1997 年以降継続して毎年度発行されており経年的な変化をみるのに適していることから、文献 14)を参考に、本研究において最も適切な資料であると判断した。参考文献 14)

注 10) 「るるぶ」にみる奄美大島の特集は体験を中心にしたものであり、ダイビング、シーカヤック、サーフィンなど海での体験の特集を「マリンアクティビティ(M)」, 原生林散策、カヌー、野生動物観察など山や川での体験の特集を「ネイチャーアクティビティ(N)」, 泥染め体験、島唄など文化を体験するという切り口からの特集を「カルチャーアクティビティ(C)」, これら以外の特集を「その他(O)」とした。

注 11) 参考文献 15) では、奄美大島における LCC 参入による影響をいくつか指摘しており、そのうちの 1 つとしてレンタカー利用者の増加を挙げている

注 12) 2006 年以降は笠利、名瀬、住用は奄美市に合併したため「概況」からは各地域の宿泊施設数が把握できないため、奄美市笠利総合支所提供の旅館業法許可施設数を用いて補完している。よって、2006 年以降この 3 地域については宿泊施設の減少は捉えられないが、増加の傾向は把握できる。

注 13) 「概況」の宿泊施設数によると 2009 年から 2015 年にかけて瀬戸内町の宿泊施設数が約 10 件減少していることがわかる。

注 14) ホテル、ビジネスホテル、旅館などを「ホテル・旅館」、民宿、ペンションを「民宿・ペンション」、国民宿舎、保養所などを「公共宿舎・保養所」とし、その他を「その他」とした。

注 15) D 期の電話帳掲載宿泊施設数は「概況」の統計データと乖離しているためここでは分析を控える。

注 16) 近年の電話帳への掲載数減少を考慮し、2018 年の電話帳に掲載されている宿泊施設 88 件に、「あまみ大島観光物産連盟」の WEB サイトに掲載された 103 件(2019 年 11 月)と、奄美大島の各市町村の WEB サイトに掲載された宿泊施設 212 件(2019 年 11 月)を合わせた 231 件(重複除く)を把握した。

注 17) 参考文献 16) に、海水浴ができる場所として紹介されている。

注 18) 参考文献 17) では、県観光物産課による「民宿のあらまし」において、民宿の特徴の一つを「美しい自然と素朴な人情や風俗に接することができる」

としている。

注 19) 2013 年に政府は「奄美・琉球」をユネスコの世界自然遺産登録候補地としての推薦の前提となる暫定リストへの記載を決定した。

注 20) 参考文献 18) では、奄美群島国立公園は、国立公園の新しい保護管理の考え方として「生態系管理型」と「環境文化型」を掲げ、世界自然遺産登録を目指している。

参考文献

- 1) Harada, Junko and Soshiroda, Akira: Kanko no atarashii choryu to chiiki (New tourism trend and region), Foundation for the Promotion of the Open University of Japan, pp.64-65, 2011.3
- 2) Song, Dajeong: Acceptance Process of Ecotourism in Amami Oshima, The Journal of Island Studies, Vol.18, No.1, pp.35-52, 2017
- 3) Suga, Yuya et al.: Amami Oshima ni okeru kanko-shigen no shouhinka (Commercialization of tourism resources in Amami Oshima), Suyama Laboratory, Geography Department, Komazawa University, pp.51-82, 2008
- 4) Marugami, Yuya and Deguchi, Atsushi: Comparison Study on Process of Forming Brand Image and Preservation of Regional Resources in Tourist Areas, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), Vol.80, No.708, pp.351-360, 2015.2
- 5) Matsuda, Noriko and Oba, Osamu: The Formation Processes of The Modern Spa Town, with The Location of Hot-Springs-Developments and The Location Tendency of The Hotel (RYOKAN) Town Area -The Case Study of the Beppu Spa, Oita-, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), No.582, pp.153-159, 2004.8
- 6) Ishikawa, Misumi: A Study on the Background of Guesthouses Opening in Japan: Findings from a Questionnaire Survey, Vol.21, pp.99-104, 2014.3
- 7) Matsushita, Shigeo: Approach to Rural Regeneration through Sustainable Tourism : A Case of Albergo Diffuso which is a model of original hospitality and sustainable development in Italy, Reports of the City Planning Institute of Japan, No.14, pp.359-363, 2016
- 8) Sogo, Hisae: Characteristics and Current Situation of “Machi-Yado” in Japan -Focusing on Interaction between Tourists and Residents-, Master Thesis of National Graduate Institute for Policy Studies, 2019
- 9) Oshima Branch in Kagoshima Prefecture: Fact Sheet of Amami Island Group, published in each year between 1971 and 2019
- 10) Japan Travel Bureau Foundation: Tabi (Travel), 1924-2004 (Suspension of publication)
- 11) JTB Publishing Inc.: Rurubu Yakushima Amami Tanegashima, published in each year between 1997 and 2018
- 12) NTT west corporation: Telephone Directory, Amami version, published in every 3 years between 1976 and 2018
- 13) Yuriko, Tsuda et al.: A Study on the Change of Image of Hot Spring Areas in the Travel Magazine “Tabi”, Journal of the City Planning Institute of Japan, Vol.46 No.3, October, 2011
- 14) Yoshiki, Kobayashi et al.: Utilization of Tourism in the City Central Vitalization Plan of Local City, Journal of the City Planning Institute of Japan, Vol.54 No.3, October, 2019
- 15) Watanabe Sinnosuke: Revitalization of local routes by LCC entry and impact on regional economy -Case study of Amami Oshima-, PRI research report, No.56, pp.40-47, 2015
- 16) Tourism Federation of Amami Island Group: Amamigunto Kanko Guidebook (Tourist guidebook of Amami Island Group), pp.34-35, 1987
- 17) Tourism Federation of Amami Island Group: Amami Kanko Dayori (Tourism news of Amami), p.3, 1972
- 18) Ministry of the Environment: Amamigunto National Park: A subtropical island with full of life - forest, sea and islanders' lives -, 2017

THE RELATIONSHIP BETWEEN THE TRANSITION OF TOURISM IMAGE AND ACTIVITY, AND ACCOMMODATIONS IN AMAMI OSHIMA

Shotaro KIYOSE^{*1}, *Akira SOSHIRODA*^{*2} and *Takashi TSUTSUMI*^{*3}

^{*1} MORI TRUST Co., Ltd., M.Eng.

^{*2} Assoc. Prof., Dept. of Architecture and Building Engineering, School of Environment and Society, Tokyo Institute of Technology, Dr.Eng.

^{*3} Assist. Prof., Dept. of Architecture and Building Engineering, School of Environment and Society, Tokyo Institute of Technology, M.Eng.

Amami Oshima Island, Kagoshima Prefecture, is expected to develop new types of tourism in the future because of increasing momentum toward its selection as a natural UNESCO World Heritage site and the introduction of low-cost carrier (LCC) flights to its airport. Accordingly, a further increase in the number of tourists and the expansion of its customer base are forecast. This study considers the transition of the relationship between tourism and accommodations in Amami to form a basis for establishing sustainable tourism in the future.

First, we divided the research periods into four categories in terms of the transition to the types of tourism in Amami, and then clarified the characteristics of each and named them as follows:

Period of Southern Island Tourism (Period I: 1970–1984): Amami was expected to function as a marine recreation base, and it conveyed the image of being the “Southern Island” prior to the recognition of its unique culture.

Period of Envisaging a Tropical Resort (Period II: 1985–1994): Despite the image of having a tropical culture, Amami leadership were aware of the resort development happening in Okinawa and therefore focused on golf courses and resort development.

Period of Diversification in Tourism (Period III: 1995–2010): Against a background the diversification of consumer needs, there was a successive promotion of experience-based tourism utilizing resources such as forests, culture, marine leisure, and the improvement of tourism facilities.

Period of Promotion for Inscription on the Natural World Heritage Site List (Period IV: 2011–2018): The leadership of Amami wanted their island to become a natural World Heritage site and a unique tourist destination. Therefore, they expanded the island’s customer segments and tourist areas through the introduction of LCC flights.

It can also be said that this change might be taken as a multilayered approach regarding the image and the activity of the island’s tourism offerings or as a diversification of the style of the stay.

Next, the following content regarding the transition of accommodations in Amami were clarified, focusing on the number, type, and location.

- (1) The change in the number of accommodations has certain characteristics in each area.
- (2) Focusing on the types of accommodations, the ratio of “guesthouses and resort inns” accounted for more than 50% of the total from around 2000.
- (3) Regarding the location of the accommodations, from 1970 to 2000, the number of accommodations decreased; they had been concentrated in central cities such as Naze and Koniya. After 2000, guesthouses and resort inns began to appear in northern Tatsugo, Uke Island, and Yoro Island.
- (4) Among the recent accommodations, the small-sized ones account for about 80% of the total. We have noted some unique facilities, such as those offering tourists a simulated experience of living on the island.

As mentioned above, this research concerned the introduction of diversified tourism activities, such as nature experiences, cultural experiences, and the expansion of the area where the accommodations locate by considering the relationship between the tourism trends and accommodations in Amami from 1970 to 2018.

(2020 年 7 月 9 日原稿受理, 2021 年 2 月 26 日採用決定)